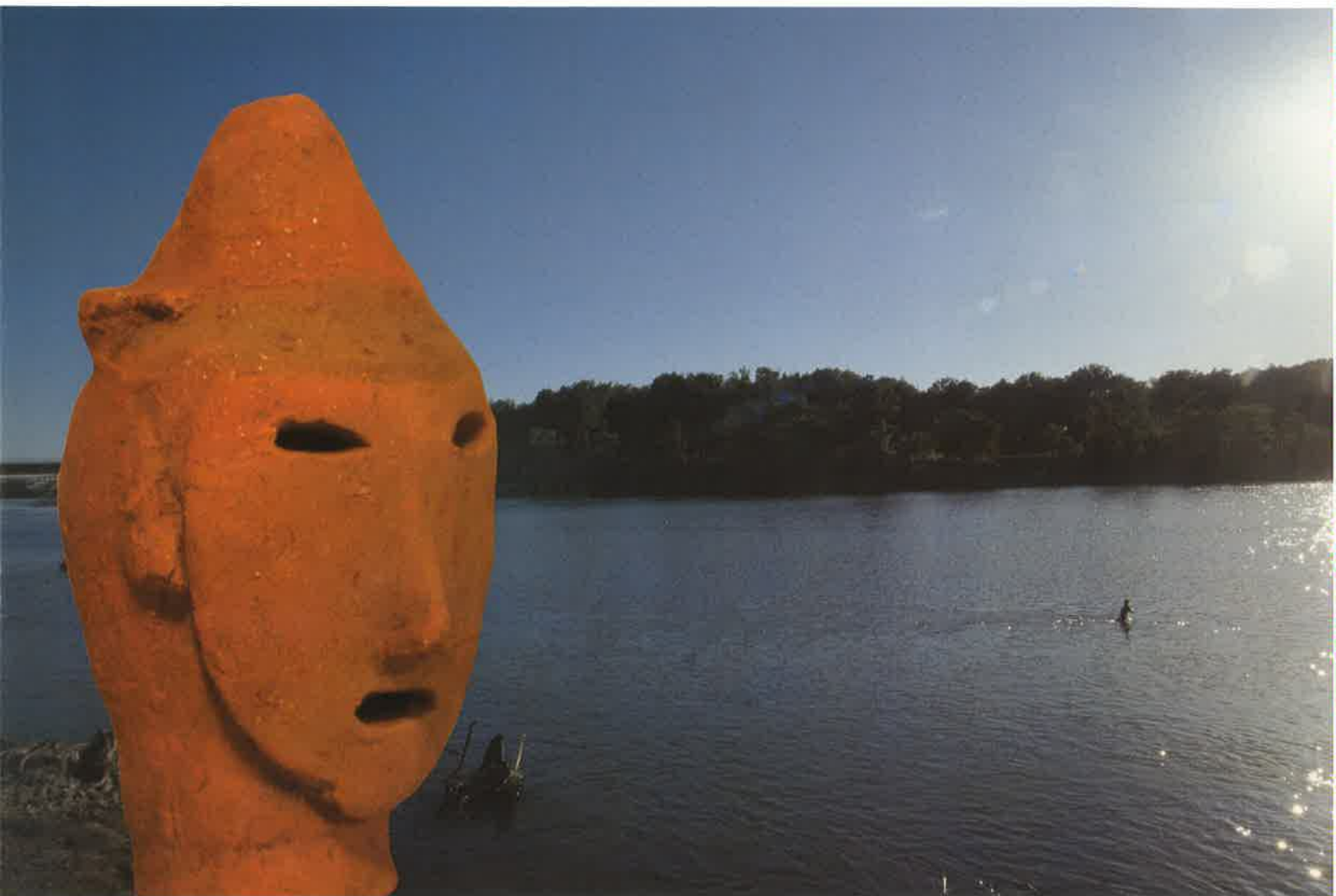


取手市埋蔵文化財センター第5回企画展

市之代古墳群

—— 小貝川の台地に眠る首長たち ——



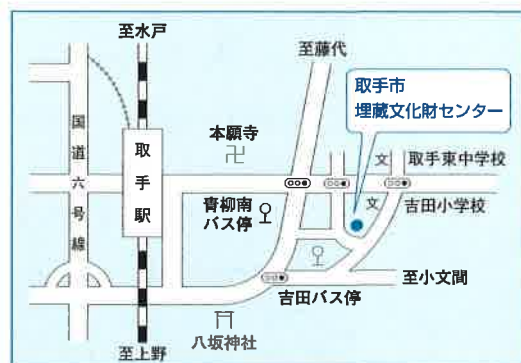
平成13年10月30日(火)～12月21日(金)

取手市埋蔵文化財センター

〒302-0007 取手市吉田383番地 TEL 0297-73-2010 FAX 0297-73-5003

交通

取手駅東口から大利根交通バス吉田バス停下車、
または関東鉄道バス竜ヶ崎、江戸崎、光風台行で青柳南バス停下車、
どちらからも徒歩約10分



開催にあたって

このたび、取手市埋蔵文化財センターでは、第5回企画展「市之代古墳群—小貝川の台地に眠る首長たち—」が開催されることとなりました。

取手市は、南を利根川に、北を小貝川に挟まれています。この二つの豊かな河川は、私たちの祖先にとっても大きな恵みをもたらしてくれる、とても重要な役割を担うものでした。

今回取り上げる市之代古墳群は、その小貝川を臨む台地の縁辺に築造された、当時この地で活躍したであろう首長たちを葬ったもので、今までに何度も大規模な発掘調査が実施され、取手市の古墳時代の解明に大きな成果をあげています。

これらの貴重な資料を紹介するとともに、そこから垣間見える古墳時代の首長たちや地域の古墳文化について理解を深める一端を担えれば幸いです。

最後になりましたが、今回の企画展の開催にあたり、ご協力をいただきました関係各位に深くお礼申し上げます。

平成13年10月

取手市埋蔵文化財センター

講演会のお知らせ

「取手の古墳時代—市之代古墳群を中心として—」

講師 諸星政得氏

(茨城キリスト教大学講師、茨城県考古学協会会長、市文化財保護審議会委員)

日時 12月8日(土) 午後2:00～3:30

会場 埋蔵文化財センター2F 講座室

定員 40名(当日先着順)

開催中のお知らせ

開館時間 午前10:00～午後4:30(入館は4時まで)

入館無料

展示資料の説明

毎週水曜日の午後2:00から、11月10日・11日・23日・24日・25日と12月8日・9日の午前11:00からと午後2:00から(予約不要)、ただし12月8日は講演会のため午前11:00のみ

例言

1. このパンフレットは、平成13年10月30日から12月21日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第5回企画展「市之代古墳群—小貝川の台地に眠る首長たち—」にともない発行されたものです。
2. この企画展の企画とパンフレットの執筆・編集は、当センター職員本橋弘美が担当しました。
3. 企画展の開催とパンフレットの発行にあたっては、次の方々にご指導・ご協力をいただきました。記して、感謝の意を表します。

(財)茨城県教育財団 埴輪研究会 藤代町教育委員会 守谷町教育委員会

1. 取手の古墳時代

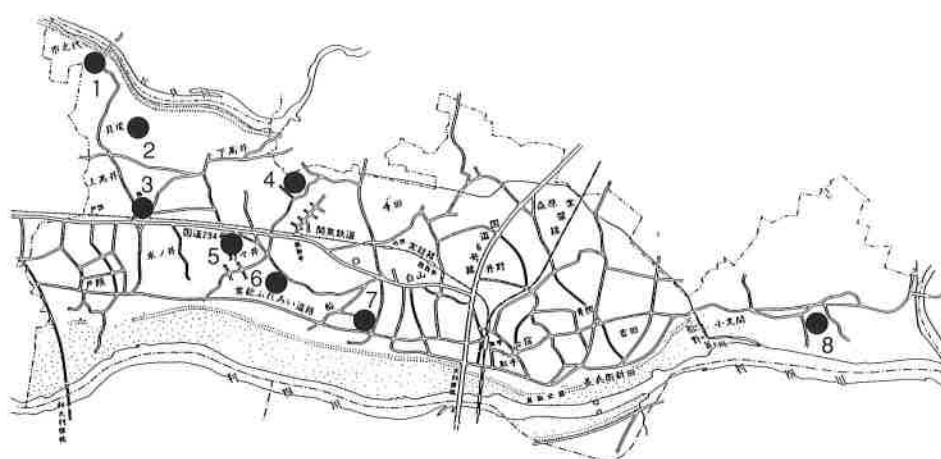
弥生時代やよいしだいになって小国が誕生し、その首長が盛り土をして大きな塚のようなお墓を築造するようになります。これが体系化され、全国に広まっています。この墳墓かみほを古墳こふんといい、古墳が築造された時代を総称して古墳時代こふんじだいといいます。4世紀から6世紀ごろのことです。

この頃は、文献では大和政権やまとせいけんが登場してくる時代です。弥生文化にくらべて急速に波及し、土器の器形や古墳の形態などさまざまな文化が画一化されていることから、古墳文化は大和政権の全国統一に深いかかわりがあるといわれています。

取手市には、古墳時代の遺物いぶつが確認されている遺跡いせきが14遺跡あります。古墳は、市之代古墳群いちのだいこふんぐん（市之代）と糠塚古墳群ぬかづかこふんぐん（上高井）の2つの古墳群があり、単独の古墳としては宗四郎坂古墳そうしろうざかこふん（小文間）があります。そのほか、埴輪はにわの破片が採集されるなど、古墳の存在をうかがわせる遺跡もいくつかあります。

古墳時代の遺跡には、ほかに集落跡があります。大渡遺跡おおわたりいせき（野々井）や大山I遺跡おおやまいいせき（野々井）では大規模な発掘調査がおこなわれており、たくさんの住居跡が出土し、調査されました。大渡遺跡では、祭祀跡さいしも見つかっており、祭祀用のミニチュアの土器や手捏土器てづくわどきなどが出土しました。

また、大山I遺跡では、平成12年度に茨城県教育財団で実施した発掘調査で、住居の中から銅鏡じゅうけい（重圍文鏡）が出土しています。権力の象徴といわれる銅鏡が住居の中から発見されるのは大変珍しいことで、古墳時代の社会構造を解明する上で重要な資料となることでしょう。

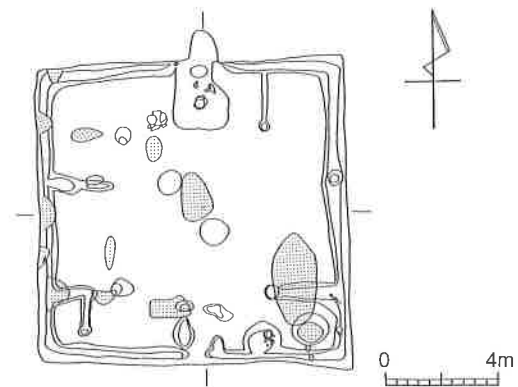


古墳時代の主な遺跡

- 1 市之代古墳群
- 2 向山II遺跡
- 3 糠塚古墳群
- 4 大山I遺跡
- 5 大渡遺跡
- 6 宿畑遺跡
- 7 稻向原II遺跡
- 8 宗四郎坂古墳



各種の土師器はじき（稲向原II遺跡出土）



向山II遺跡1号住居跡実測図

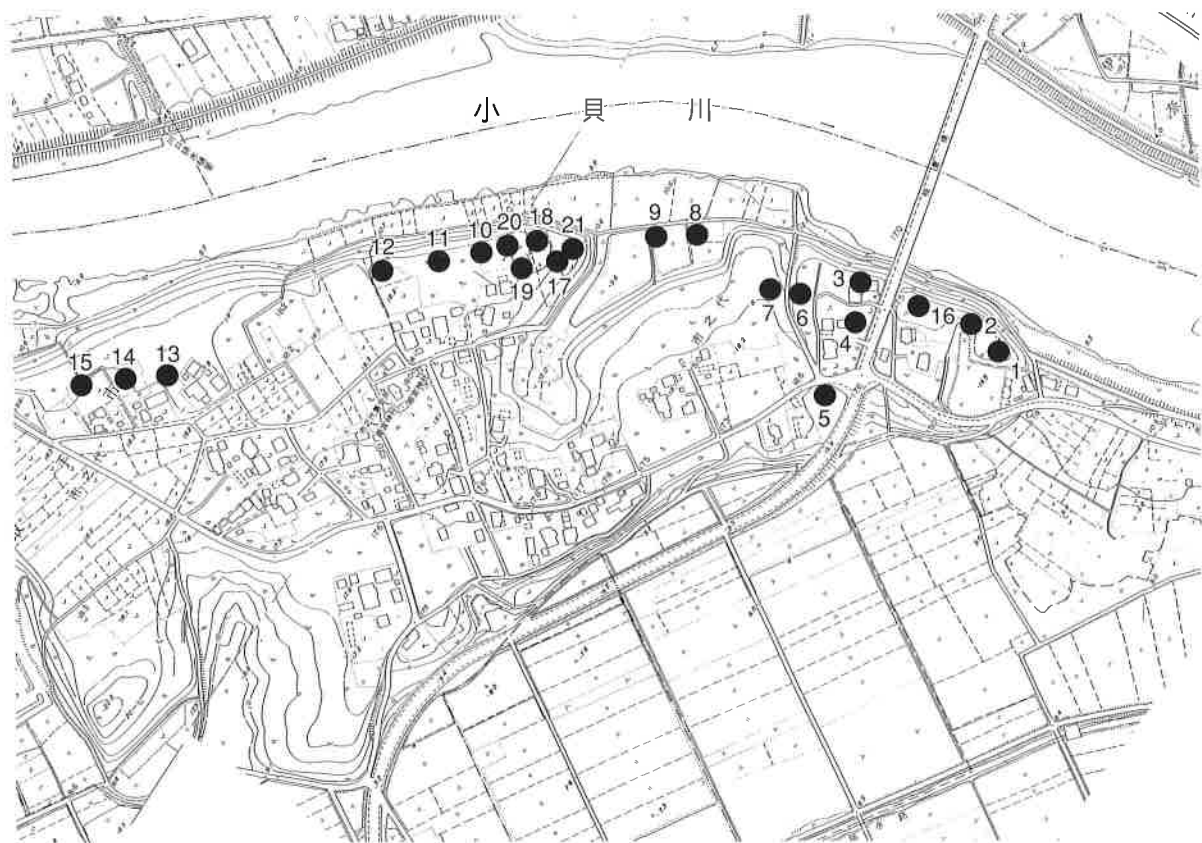
2. 市之代古墳群

古墳が出現するのは、最近のめざましい研究成果ではさまざまな説がありますが、おおまかに言えば畿内や九州など西日本になります。そこから私たちの住む東国へ伝播しますが、それは東海道や北陸道などの古代の主要交通網に沿って伝播されます。ここからも何らかの一元的な要因がうかがえ、大和政権の存在が浮かび上がるのではないのでしょうか。そして、中期になるとこの茨城にも大規模な前方後円墳が多く造られるようになります。

古墳時代後期に入ると、各地で一つの場所に比較的小規模な古墳がたくさん築造される、古墳群が現れます。これは、古墳に埋葬される被葬者の数が増えたことを意味します。権力を持った首長の数が増えたともいえますが、古墳の築造が一般化され、比較的低い階層の権力者も古墳を築造するようになったようです。市之代古墳群もこのような背景によって造られた古墳群です。

市之代古墳群は、昭和51年（1976）に実施された取手市遺跡分布調査で16基の古墳の存在が確認されてきました。その後、平成9年（1997）に農園造成の事前確認のため発掘調査を実施したところ、墳丘がまったく残っていなかった17号から21号の5基の古墳を新たに確認・調査し（写真裏表紙）、現在のところ21基が確認された市内最大の古墳群です。1号墳・3号墳・4号墳の3基は前方後円墳で、ほかの17基は円墳です。21号墳は確認範囲が不十分なため不明となっています。

これらは、幾度かの大規模な発掘調査が実施されています。5基の未周知の古墳を確認した平成9年の調査のほか、昭和52年（1977）には3号墳を発掘調査し、昭和58年（1983）には学術調査として8号墳・9号墳・10号墳を発掘調査しています。



市之代古墳群分布図

3. 3号墳

昭和52年（1977）、道路工事のために3号墳と4号墳が一部削平されてしまいました。連絡を受けた教育委員会では、これ以上の古墳の破壊を防ぐため、工事計画の範囲内にある3号墳の調査を早急を実施することになりました。

工事によって、後円部はほとんど削平されて調査できませんでしたが、推定で全長約20m、後円部径約13m、前方部幅約12mの小型の前方後円墳であることがわかりました。

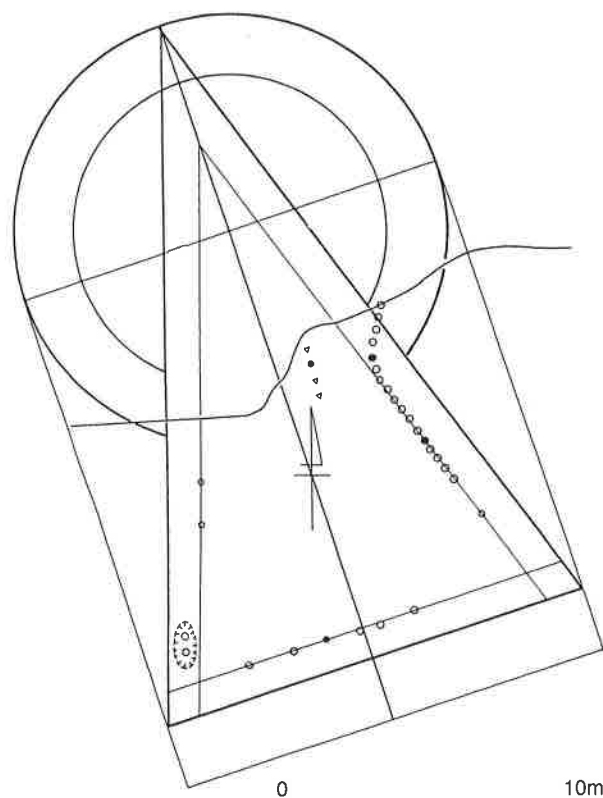
3号墳は、小貝川を臨む台地の端に位置し、東側は台地の崖に接しています。地形を有効に利用し、後円部にわずかに盛り土しただけで、対岸からよく見えるように工夫されています。

調査では、被葬者が埋葬された主体部は確認できませんでしたが、古墳の装飾であり、墳丘上の祭祀に利用されたといわれる埴輪が、一部配列された当初の形のまま多数出土しました。

埴輪は、人物や馬など、あるものの形を表現した形象埴輪と、器台として利用されたといわれる円筒・朝顔型埴輪の2種類に大別できます。本来は墳丘上祭祀に使われるものをのせる役割をはたす特殊な土器から発展したため、古墳にたてられる埴輪の多くは円筒埴輪や朝顔型埴輪です。

市之代3号墳の東側から見つかった埴輪列も、2本の朝顔型埴輪の間に7本の円筒埴輪が挟まれるという、規則的な配列で出土しています。ほかに、形象埴輪も多数出土しています。人物埴輪の頭部は、まげの結い方からそれぞれ男性と女性とわかります。武人埴輪は頭部と両手先が不明ですが、肩甲を身に付けていることがよく表現されています（写真裏表紙）。

また、この調査で、前方部の西側に2つの円筒埴輪をつなげるようにして埋葬した埴輪棺が出土しました。このように古墳には主体部以外に埋葬施設が見つかることがあり、追葬と考えられています。



3号墳墳丘復元図



3号墳埴輪棺出土状況



3号墳埴輪列出土状況

4. 8号墳

市之代古墳群は、開發の波からも逃れ、地域の人に守られ、比較的よい保存状態にあります。しかし、本来が小規模な古墳が多いため、自然の風雨などによって墳丘が浸食されている古墳も多くあります。そこで、古墳群の性格を把握するため、昭和58年（1983）に8号墳・9号墳・10号墳の学術発掘調査を実施しました。

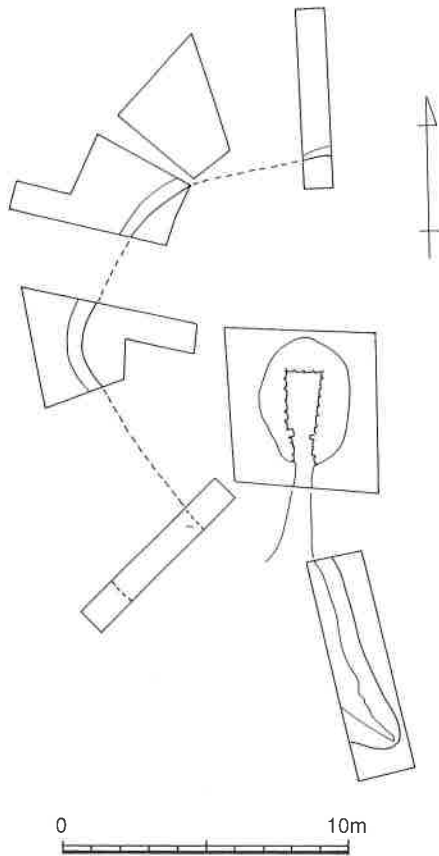
古墳はほとんどの場合、区別化するために墳丘の周りに周溝という溝をめぐらせます。前述の3号墳のように自然地形を利用した古墳には周溝のないものもありますが、ほとんどの古墳が周溝をともない、墳丘が残っていない古墳の発見や規模の推定に大変重要な情報をもたらしてくれます。

昭和58年に調査した9号墳・10号墳も墳丘はほとんど確認することができない状態でしたが、調査によって周溝が確認され、規模を把握することができました。いずれも円墳で、9号墳は直径約13m、10号墳は直径約16メートルで、10号墳の周溝からは埴輪片が出土しました。

8号墳は、昭和58年当初墳丘の高さが約1mありました。調査の結果、周溝と、主体部の横穴式石室が出土しました。古墳の規模は、直径約14m、周溝の幅約3mの円墳です。

被葬者を埋葬する方法はいくつかありますが、中でも石室をつくる方法も2種類あります。ひとつは盛り土したあとに穴を掘り、石を敷きつめた中に棺を埋葬する竪穴式石室です。それに対し、横穴式石室と呼ばれるものは、古墳に盛り土をするときに石室も組み上げる方法でつくられ、棺を納める玄室から羨道という墳丘の外に伸びる通路を作ります。大陸からもたらされた新しいものです。

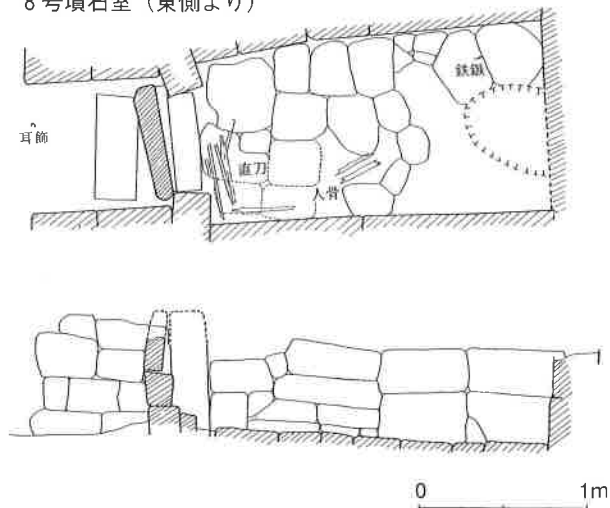
石室の形式から、この8号墳は市之代古墳群の中でも、もっとも新しい時期の築造と思われます。



8号墳調査区全測図



8号墳石室（東側より）



8号墳石室実測図（上 平面図、下 側面図）

5. 周辺の古墳群

市之代古墳群がある市之代は、北側は小貝川の南縁にあたり、南側は小貝川からの浸食谷が入り込んでいる、ひとつの独立した台地上に位置しています。この台地上には、市之代と守谷町の同地地区の2地区があります。

市之代古墳群は、この台地の北側、小貝川を臨む台地の端に位置しています。同地地区にある同地古墳群（守谷町）もやはり台地の北側、小貝川を臨むほうに位置しており、円墳3基を確認しています。

同地古墳群は、昭和57年（1982）に病院建設にともなって、3号墳が発掘調査されています。直径約13m、高さ1.4mの円墳で、周溝を持つ古墳です。また、1号墳からは埴輪が出土しています。

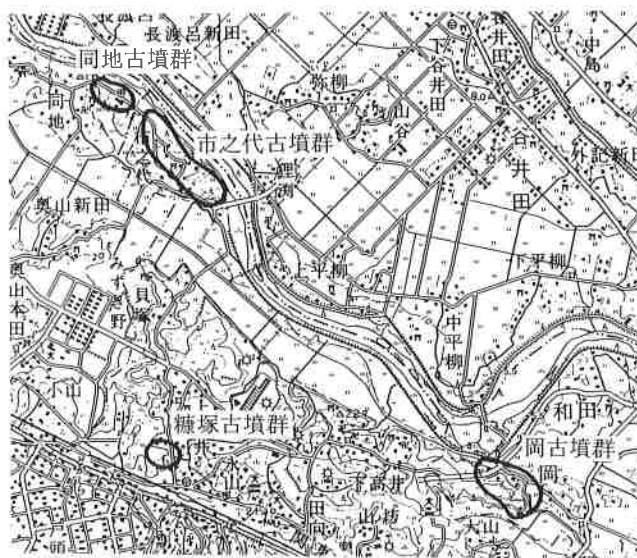
立地や古墳の規模、時期から、同地古墳群と市之代古墳群は一連の古墳群と考えていいでしょう。

また、同じ小貝川の南縁には、大日山古墳など6基の古墳が確認されている岡古墳群（藤代町）があります。未調査ですが、大日山古墳は埴輪が出土したと伝えられており、昭和14年（1939）に茨城県の史跡に指定されています。墳丘の裾がかなり削られているため規模はわかりませんが、円墳と思われます。

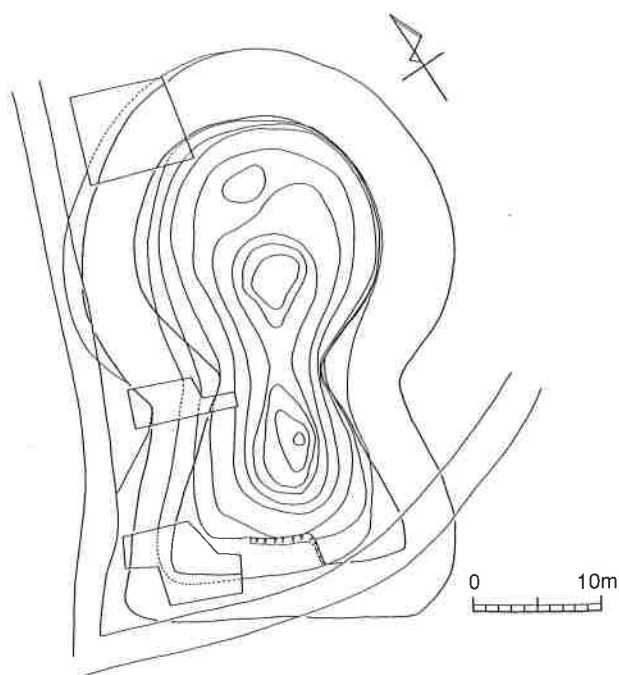
また、『取手市遺跡分布調査報告書』（1978）では、市之代古墳群と岡古墳群の間の台地上にも複数の古墳の存在を示唆しています。

また、小貝川に直接面していませんが、小貝川から伸びる浸食谷に面した台地に3基の古墳からなる糠塚古墳群（上高井）があります。1号墳は全長32m、後円部径18mの前方後円墳で、昭和59年（1984）と平成10年（1998）に範囲確認調査を実施しています。平成10年の調査の際にはたくさんの埴輪片が出土しました。市内で初めて鶏型埴輪が出土したほか、楯と太刀型の埴輪がセットで出土するなど、貴重な資料がたくさん出土しました。埴輪の形態から市之代3号墳より古い時期までさかのぼれるようです。

2号墳・3号墳ともに墳丘が残っておらず、2号墳は昭和59年の確認調査で、3号墳は平成10年の確認調査でその存在が明らかになりました。2基とも円墳です。糠塚古墳群には未確認の古墳がまだあると思われます。



小貝川流域の古墳群分布図



糠塚1号墳測量図



壺型土器（大渡遺跡出土）



市之代17～21号墳発掘風景



人物埴輪（男性）（市之代3号墳出土）



人物埴輪（女性）（市之代3号墳出土）



武人埴輪（市之代3号墳出土）



人物埴輪出土状況（糠塚1号墳）